ISSN 1342－8071

ZEPHYROS

2000年
第7号

国立西洋美術館ニュース　ゼフュロス
The National Museum of Western Art, Tokyo

レンブラント、フェル
アムステルダム国立美術館

目　　次

レンブラント、フェルメールとその時代
アムステルダム国立美術館所蔵
17世紀オランダ美術展 ……2
学芸課長　幸福 輝

死の舞踏－中世末期から現代まで－
デュッセルドルフ大学版画素描コレクションによる …4
主任研究官　田辺 幹之助

エッセイ　「上野の杜」発 ⑥……5
寛永寺執事　浦井 正明

’99展覧会リポート ……6
財団インフォメーション ……7
ゼフュロスギャラリー

かつて、17世紀オランダ絵画といえば、すぐに風景画や静物画、あるいは、風俗画を連想させたものでした。神話主題や宗教主題という虚構の世界の描写から解放され、人々の日常生活を描いたものがオランダ絵画であり、そこに描かれたものはオランダという国の肖像そのものであると考えられていたからです。ことあるごとに、写実主義という言葉が引用され、17世紀オランダ絵画のイメージを固定していきました。しかし、このような17世紀オランダ絵画の相貌は急速に変わりつつあります。

第一に、17世紀オランダには、オランダではなく、イタリア的景観に魅せられて牧歌的風景を描いた一群の画家たちがいました。薄曇りの空を背景に運河や農村が広がるいかにもオランダ的な風景が愛されたことは事実ですが、明るく降り注ぐ陽光と異国的な景観、そして、どこか文学的雰囲気をたたえたイタリア的風景を描く作品もまた人気を誇っていました。すなわち、この時代にはオランダ的風景と非オランダ的風景が共存していたのです。また、オランダ絵画を丹念に見ていくと、神話主題や宗教主題の作品が決してないわけではなく、むしろ、この時代

ヤン・ファン・ホイエン
《二本の樫のある風景》
1641年

メールとその時代
所蔵　17世紀オランダ美術展

会期：2000年7月4日（火）～9月24日（日）
主催：国立西洋美術館／東京新聞

のオランダ絵画を語るに欠かせない重要な作品の多くが、実は、こうした物語主題の絵画、いわゆる物語画であったことに気づかされます。

これだけの単純な事実からでも、17世紀オランダ絵画の特質を「非物語画」と「写実主義」というふたつのタームで説明することには無理があることが理解されるでしょう。しばしば指摘されてきたことですが、肖像画を別にすれば、レンブラントの作品のほとんどは物語画です。17世紀オランダ絵画をその非物語性において讃えながら、他方、その流派を代表する画家がその対極に位置する物語画の制作に邁進していたという事実はいかにも奇妙なことですが、従来はレンブラントを「偉大な例外」とするやや苦しい解釈が広く浸透していました。

この展覧会はこうした近年のオランダ絵画観の変化を充分に意識しながら、これまでのオランダ絵画展とはかなり異なった作品をも積極的に取り入れようとしたものです。展覧会の中核を構成する各章はそれぞれ、「オランダの景観」、「静物画の世界」、「レンブラントと肖像芸術」、「フェルメールと風俗画」とオーソドックスな内容になっていますが、そこには従来のオランダ絵画の考え方からは相当隔たった作品も含まれ、また、これにオランダ・マニエリスムの作品や古典主義的傾向をもつ作品からなる「黄金時代の曙」と「神、聖人、英雄」という２章を加え、17世紀オランダ美術を多元的にとらえ直そうとしています。本展は日蘭交流400周年の記念事業で、17世紀オランダ美術の本家ともいうべきアムステルダム国立美術館の所蔵品96点（絵画50点、版画素描46点）が出品されます。400年の日蘭関係にも思いをはせながら、この新視点からの17世紀オランダ美術展を御覧ください。

（学芸課長　幸福 輝）

ヤン・ダーフィツゾーン・ド・ヘーム
《果物と花の壁飾り》
1655年頃

レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《聖パウロに扮した自画像》
1661年

死の舞踏－中世末期から現代まで－
デュッセルドルフ大学版画素描コレクションによる

会期：2000年10月11日（水）～12月3日（日）
主催：国立西洋美術館／デュッセルドルフ大学／財団法人西洋美術振興財団

若者から老人に至るまで、あるいは教皇、皇帝から行商人に至るまで、あらゆる身分と年齢の人間を踊りに誘う死の舞踏のイメージは、中世の末に成立しました。それはヨーロッパに速やかに広まっただけではなく、中世末期の社会的・宗教的状況を超えて今日に至るまで、あらゆる世代の作家、美術家、音楽家たちによって取り上げられてきました。本展覧会は、中世末期から現代に至る死の舞踏図の展開を観察することで、このイメージを西洋美術のひとつの重要な側面として浮き彫りにします。

このような趣旨に沿って、本展覧会は大きく2つのセクションに分けられています。第1セクションでは、「擬人化された死が生のさまざまな局面で、その局面に則した死の形を提示する」と言う、死の舞踏図の伝統による作品を、中世末期から第二次大戦以後現代に至るまでの各エポックに沿って概観します。

また、第2セクションは、こうした包括的な死の舞踏連作から派生したテーマの作品を含み、「死と病」、「死と愛」、「死と戦争」、「死と芸術家」の小セクションによって構成されています。初期の死の舞踏図には「医者」、「美しい女性」、「兵士」、「画家」と言った諸身分の代表者たちが登場しますが、これらの人物像はやがて具体的な人物である以上に、「病」、「性愛」、「戦争」、「芸術」といった概念を表し、独立した美術の主題を形成するようになります。そのような変化を通して、第2セクションに展示される作品は、社会的な問題としての死に至る病、性愛に含まれる死、戦争や革命のもたらす惨禍、死に対する芸術家の自意識という諸問題を、死の擬人像のいる場面の中に描き出しています。

ミヒャエル・ヴォールゲムート
《骸骨の舞踏》
（ハルトマン・シェーデルの『世界年代記』264葉ｒ.）
1493年
彩色木版画

アルフレート・レーテル
《友としての死》
1851年
木版画

この展覧会は、デューラー、ホルバイン、レンブラント、ホドヴィエツキ、ローランドソン、エンソール、クリンガー、ムンク、エルンスト・フックス、ホルスト・ヤンセンと言った作家の版画・素描約300点からなり、主としてデュッセルドルフ大学の版画素描コレクションによって構成されるものです。同大学の医学史研究所によって管理される版画素描コレクションは「人間と死」というテーマによって制作された作品を包括し、数千点におよぶ膨大な収集を誇っています。今回の展覧会は同コレクションの作品に国立西洋美術館の所蔵する版画を加え、世紀の転回期を機に、過去500年にわたる死を主題とする西洋美術を、「死の舞踏」というたいへん魅力的なイメージを通して振り返ってみようという試みです。

（主任研究官　田辺 幹之助）

寛永寺執事　浦井 正明
（うらい　まさあき）
1937年東京上野生まれ。慶應義塾大学文学部史学科卒。天台宗東京教区財務、不忍池弁天堂輪番を経て、現在寛永寺現龍院住職、天台宗典編纂所編纂委員、台東区教育委員、台東区史編纂専門委員、台東区文化財保護審議会委員。著書に「もうひとつの徳川物語」（誠文堂新光社）他。

江戸名所「上野」

新興都市江戸の中で、古くからの名所浅草と並んで、上野が逸早く新しい名所としての位置を固めたことは、よく知られています。

江戸時代の寛永寺は今の上野の山全域とその周辺地を含む三十万五千坪余（不忍池六万坪は別）という広大な緑溢れる境内に、三十余棟の主要な伽藍（徳川将軍霊廟や子院を含めると百棟程）が林立していました。

例えば、精養軒手前の広場に在って、年に数回登楼を許した雄大な山門（吉祥閣）や今の中央噴水の地に在った間口二十五間、奥行二十三間、高さ十八間という壮大な根本中堂といった伽藍は人々の関心の的だったのです。

加えて、上野には四季それぞれの風物が揃っていましたから、江戸の市民はもちろん、旅行者にとっても、上野は正に必見の地だったのです。（春－梅、桜、夏－新緑、夕涼み、蓮、秋－紅葉、月見、冬－雪景、寒椿）。

このことは、江戸時代に描かれた錦絵の画題として、この上野が最も多いことでもわかります。

例えば、初代の広重は、この上野の山とその周辺だけで、実に七十五点もの作品（肉筆を除く）をのこしているのです。

では、江戸に入った頃にはまったくの自然の森であった上野が、なぜこのように急速に江戸屈指の名所になっていったのでしょうか。

実は、筆者はその切っ掛けは寛永寺を開いた天海の見立てという発想に在ったのではないかと思う。と言うのは、寛永寺の開創時において、天海には、この上野について、幕府と共通する構想と共に、もう一つ別の発想があったと思うからです。

前にあげた根本中堂や吉祥閣をはじめ、常行堂や法華堂などの主要伽藍は、すべて幕府の手によって、広小路からの表参道に向かって南面して建てられた。それらは比叡山延暦寺に倣って江戸に鎮護国家と幕府、将軍らの安泰を祈る法城を造ろうというものでした。

しかし、天海はこれらの伽藍とは全く別に、いくつかの堂宇を建てた。清水観音堂、不忍弁天堂、祇園堂、大仏などがそれです。

これらはすべて表参道から外れた脇の地に在って、しかも、堂宇の向きも東向、西向と一定していません。

その上、これらの堂宇の建築費は、すべて天海自身の私費か、天海に賛同した大名達の寄進で、幕府は全く関係ないのです。

更に大切なことは、これらの堂宇がすべて京都や滋賀に在る著名な名所であったことです。いわば天海は、この上野に京都を中心とした名所を写し、新興地江戸の新しい名所を造ろうと考えたのです。天海が吉野山の桜を上野に植えたのも、正にそうした名所造りの構想の一つだと思います。

こうした天海の見立て（写し）という発想が基本に在ったからこそ、寛永寺が幕府や朝廷の祈願寺という官立寺院でありながら、同時に江戸随一の四時行楽の地＝名所として急速に育っていったのだと思うのです。

エルミタージュ美術館所蔵イタリア・ルネサンス美術展

ーフィレンツェとヴェネツィアー

会期：1999年3月20日（土）～6月20日（日）
入場者数：402,896人

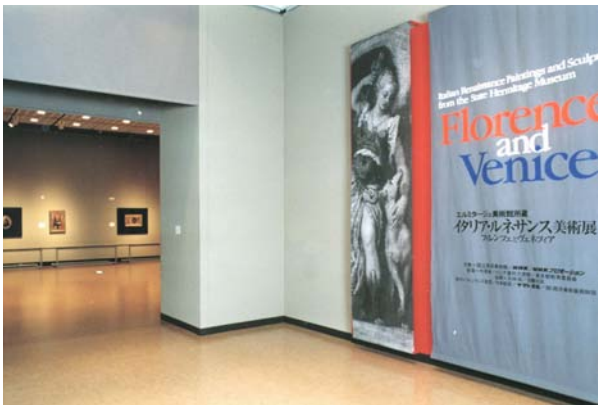
展覧会が終わり、会場を片付け、お借りしたすべての美術品を無事に返送し終わると、担当者はなんともいえないほっとした気分になります。イタリア美術、特にルネサンス美術となると、なかなか展覧会を企画するチャンスというのが多くはなく(西洋美術館としてはこれが３度目です)、今回40万人以上の方々に展覧会を見ていただけたことを、たいへんうれしく思います。

ご存じのようにエルミタージュ美術館は、ヨーロッパ美術のさまざまな分野で素晴しいコレクションをもっています。そのなかから、今回の展覧会を「イタリアもの」で構成してみようという考えは、かれこれ５年近く前にスタートしました。ある国際学会で、イリーナさんというエルミタージュでヴェネツィア絵画を担当する旧知の学芸員と、たまたま一緒になったことがきっかけです。学会の打ち上げパーティーで話をし、展覧会ができるか尋ねたところ、充分可能性ありという返事でした。不思議に思われるかもしれませんが、大きな展覧会計画がちょっとした偶然の立ち話から進んでいくというのは、案外よくあることなのです。

イリーナさんも私も、本来の専門分野がヴェネツィア絵画であるため、最初のアイディアは、もう少し遅い時代まで含めて、ヴェネツィア派だけで展覧会を構成することでした。しかしエルミタージュがもっている多くのフィレンツェ派の作品も捨てがたく、また当館の高階秀爾館長の強い希望もあって、フィレンツェ派とヴェネツィア派の２本だてでいくことになったわけです。結果として、ふたつの流派の特徴を比較できるような形で内容を構成しよう、という方向になりました。

またこの展覧会では、付随的な試みとして、西洋美術館がわずかながら所蔵するイタリア・ルネサンスの作品のうち、フィレンツェ派とヴェネツィア派の作品を、エルミタージュの作品と一緒に展示することが行なわれました。これは、ふだん常設展示のなかでは孤立している作品を、同じ時代、同じ流派の仲間たちと並べて展示することによって、それらの歴史的な位置づけを示せれば、という意図からです。これを機会に、当館にあるイタリア作品にも関心が寄せられることを願っています。

（主任研究官　越川 倫明）



記憶された身体ーアビ・ヴァールブルクのイメージの宝庫

アルベルティーナ版画素描館／オーストリア国立図書館より

会期：1999年7月6日（火）～8月29日（日）
入場者数：29,392人

この展覧会は、一人の作家や時代に焦点を絞ったものではありません。20世紀初めにハンブルクで活躍した美術史家アビ・ヴァールブルクの研究の一端を、彼が残した資料と版画素描の名作によって視覚的にたどってみようという試みです。企画の段階でこうした難解なテーマが受け入れられるか不安はあったものの、採算を度外視して展覧会を開けるのは今や国立美術館だけだという使命感に従って開催する運びとなりました。

ヴァールブルクは、西洋の身体表現に古代以来の定型表現が繰り返し現われることの謎に取り組んだ美術史家です。この難解な研究をいかにわかりやすく紹介することができるかに展覧会の成功がかかっていました。そのために彼の研究を下敷きとして「西洋の身体表現とは何か」「理想的プロポーション」「躍動する手と瞑想する手」という視点を3つのセクションを設定しました。実際に、連続して並べられた作品の関係を見ていくことによって、鑑賞者はおのずと彼の美術史的な視点を得ることができたはずです。そして最後のセクションに展示されたヴァールブルクの美術史研究ツール「ムネモシュネー」を記録した写真によって、会場で見てきた作品の連続が、ヴァールブルクの問題意識に重なることに気付くように構成しました。実験的ともいえるこの展覧会を訪れた鑑賞者の多くは、多少の違和感を覚えたかもしれませんが、最後には、美術史とは一体どういう学問なのか、肌で感じてくれたに違いありません。

アンケートからも、この展覧会が意欲的であるとの評価が多く、日本においても学術的な展覧会が望まれていることがわかり、大変励みとなりました。同時に、テーマが学問的過ぎるというご批判も頂きましたが、昨今の名作だけを並べてよしとするような風潮に一石を投じることこそ西洋美術館の役割ではないかと考えております。この展覧会は西洋美術館の後、ハンブルクの美術工芸博物館に巡回、好評の内に幕を閉じました。

（主任研究官　佐藤 直樹）

オルセー美術館展　1999　19世紀の夢と現実

会期：1999年9月14日（火）～12月12日（日）
入場者数：589,457人

1996年に東京都美術館、神戸市立博物館で催された展覧会「オルセー美術館展　モデルニテ－パリ・近代の誕生」（国立西洋美術館学術協力）を引き継ぎ、発展する形で生まれた本展は、ほぼ３年の準備期間を経て実現、開催されました。「現代性（モデルニテ）」という19世紀の新しい感受性を主題とした前回の展覧会に対して、今回のテーマは、19世紀という進歩と科学的実証主義の時代に現れた、一見矛盾する二つの傾向の対立そのものでした。バルビゾン派やクールベに代表されるレアリスムの流れは、世紀後半には自然主義の大きなうねりとなって19世紀芸術の太い幹となっていきました。その傍ら、世紀前半の新古典主義やロマン主義の勃興に見られるような、ある時は理想主義的な形で、またある時は暗い情動的な内容で表されるロマン義的傾向は、世紀末に至って唯美主義、象徴主義、アール・ヌーヴォーなどの芸術表現に結実していきます。

本展は、そうした二つの傾向の絡み合いが、1)「人間と物語」a.神話　b.宗教　c.文学　2)「人間と歴史」〈戦争／共和国〉3)「人間と現代生活」a.家族　b.労働　c.余暇　d.都市　4)「人間と自然」a.人体　b.風景　c.植物誌、動物誌　5)「孤独な人間」〈憂鬱な監視兵〉といったテーマ設定に従って展示されたオルセー美術館の所蔵作品を媒介として理解できるようにしたものです。いわば本展を通じて、19世紀美術の「混沌とした」重層的な姿が開陳されることを目的としました。200点あまりの展示作品はオルセーの常設展示を代表するような著名作品から、収蔵庫の奥深くしまわれ、普段は余り眼にすることのない作品まで、ヴァラエティーに富むものとなりました。扱われたジャンルも絵画、彫刻のみならず、素描、パステル、挿絵の下絵、建築デッサン、工芸、写真といった、オルセーの所蔵品のほぼ全領域を網羅するものとなりました。

単一の美術館からの貸出展であったにもかかわらず、このような強いテーマ性 － それも社会史的、思想史的観点から － を帯びさせたコンセプトの存在が本展の特色であったといえるでしょう。その点が、専門的な視点から積極的な評価を受けたものの、一種の「名品展」を予測、期待して訪れた鑑賞者の戸惑いを生み出したことは否めません。これは今後、この種の展覧会に余り馴染みがない人々に対してより一層の普及・教育を行っていくことと、大量動員を想定した展覧会の宣伝活動と実際の内容の齟齬を、出来るかぎり抑えていくことによって解消されていくものと思われます。

他方、神戸会場、東京会場ともに一日平均7,500人以上の来場者を記録した本展は、結果的に近年の国立西洋美術館の入場者数としてはバーンズ・コレクション展（1994年）以来の数字となりました。土、日曜日の日時指定観覧券、無料観覧券の制限、金曜日の8時までの夜間開館などの効果もあってか、懸念された混雑もほぼ許容される範囲で推移し、しばしば見られる会期終了間際の異常な混雑もなかったのは幸いでした。しかし、大量動員を必然とされた展覧会に付きまとう種々の問題は解消されたとは言えず、開館時間や滞留人数の問題などが今後の課題として残されました。

（主任研究官　高橋 明也）

日本経済新聞社

財団（西洋美術振興財団）インフォメーション

◆賛助会員の募集

賛助会員制度は、財団発足後準備期間を経て平成８年に発足しました。わたしが美術館を育成する…そんな思いで納めてくださる会費は、すべて財団を通して国立西洋美術館の事業に有効に使用され、美術愛好家の皆様に優れた展覧会として還元されます。

●財団評議員　佐治敬三氏（サントリー会長）におかれましては、平成11年11月3日に逝去されました。生前のご指導に感謝申し上げるとともに謹んでご冥福をお祈りいたします。

会員の年会費は個人10万円、法人１口30万円で、何時からでもご加入いただけます。会員には下記のように種々の特典がありますので、ご加入をお待ちいたしております。ご加入希望の各位は、先ず応募要項を事務局までご請求ください。

■会員優遇内容

1．国立西洋美術館優待券（個人１枚、法人１口１枚）が発行されます。
〈他の国立美術館・博物館等の展覧会が無料で観覧できます。〉
2．賛助会員証を差し上げます。〈国立西洋美術館の展覧会が無料で観覧できます。〉
3．国立西洋美術館の展覧会招待状、無料観覧券をお送りします。
4．国立西洋美術館の所蔵品図録「名作選」や展覧会図録等をお送りします。
5．国立西洋美術館の主催事業（講演会等）への無料参加ができます。
6．国立西洋美術館内のミュージアム・ショップの販売品（対象商品に限られます）が10%割引となります。

編集後記

早いものでZEPHYROSも第7号です。ミレニアムを迎え更に充実した内容でお届けするために、読者の皆様のお知恵を拝借したいと思います。ZEPHYROSに新しい西風を吹き込むべく、ご意見、ご要望、ご感想などお待ちしてます。　（は）

ヨハネス・フェルメール

恋文
1668年頃
油彩・カンヴァス
44×38.5cm
アムステルダム国立美術館
「レンブラント、フェルメールとその時代」展
出品作品

● 誌名について

「ＺＥＰＨＹＲＯＳ」（ゼフュロス）はギリシャ神話の神々のひとりで、西風を司る神様の名前です。西風は、日本では秋の風とされていますが、西欧では暖かさを運ぶ春の風をさします。

ZEPHYROS 国立西洋美術館ニュース
ゼ フ ュ ロ ス

ＺＥＰＨＹＲＯＳ　第7号
印刷発行日　平成12年3月14日（年2回発行）
編　集　国立西洋美術館
印　刷　株式会社　アイネット
発行者　財団法人　西洋美術振興財団
〒110―0007　東京都台東区上野公園7-7
国立西洋美術館内
TEL 03-5685-2122 / FAX 03-3828-5135